学習言語習得のメカニズムと他教科への応用　－国際バカロレア・ディプロマプログラムの実践から－

東京都立国際高等学校　指導教諭（地理歴史科）・DP コーディネーター　青木　一真

１　はじめに

本寄稿では、英語教育の門外漢ではあるが、東京都立の国際バカロレア認定校で IB 教育を実践してきている立場から、言語教育における学習言語習得のメカニズムが他教科での学習にどのように応用されようとしているのかについて、国際バカロレアの最新動向を交えて紹介をしていきたい。そのことにより、英語教育に携わる先生方の日々の実践が、勤務されている学校の内外で教科の枠を超えて、より広く共有され、授業力の向上につながることを最終的な目的としたい。

２　BICS と CALP　－言語習得の２つのメカニズム－

Cummins[1]が基礎的個人間コミュニケーション能力（BICS; Basic Interpersonal Communicative Skills　以降 BICS）と異なる、学習言語習得度（CALP; Cognitive Academic Language Proficiency　以降 CALP）の教育的効果に関する研究を行い、それを国際バカロレア機構（International Baccalaureate　以降 IB）が本格導入を水面下で開始したことを私が知ったのは２０１５年の暮れであった。当時、IB はディプロマプログラム（Diploma Programme　以降 DP）、すなわち高校２年・３年次に実施する世界中の大学への入学資格を得るためのプログラムの、地理のカリキュラム改訂を行うにあたり、日本語訳の監修者を探していた。訳の監修としてオランダ、ハーグにある IB の翻訳機関に協力することになった私は、IB が CALP を本格導入する２０１９年より前に以下の表を見ることになり、大きな衝撃を受けた。

表１　A framework for planning CALP development[2]

Cognitive Academic Language Proficiency ↓ skills	Pedagogy →			
	Activating background knowledge	Scaffolding for new learning input	Acquisition of new learning through practice	Demonstrating proficiency
Listening				
Speaking				
Interacting				
Reading				
Writing				
Command terms and thinking skills				

[1] Cummins, J, Brown, K, and Sayers, D. (2007). *Literacy, Technology, and Diversity: Teaching for Success in Changing Times*. Boston, Massachusettes, USA. Pearson.

[2] International Baccalaureate. (2020). *Economics teacher support material First assessment 2022*. p.30

この表は、最終的に学習者が求められるアウトプット能力、すなわち筆記による学習言語の表現（表の一番右下部分）に、既習事項である学習言語をどのように発達させていくのか、という学習のステップに極めて明確な指針を与えてくれるものであった。この CALP は IB 教育にとってもまだ新しい実践であり、明確な指導事例が IB から発表されているのは DP 経済と DP 数学だけである（２０２１年１月現在)。以降に、IB が CALP の例を明示させている DP 経済及び、私の担当科目である DP 歴史の例も紹介しながら、この表の具体的な活用方法について紹介していきたい。

２　CALP を踏まえた教科の指導事例

①　DP 経済における指導事例（IB のガイドより）

IB はそのガイドで以下のような５つのアクティビティを例示している[3]。まずは以下のアクティビティをご覧いただきたい。尚、例示はガイドの例を著者が翻訳、要約して掲載している。実際はより細かい事例や、評価方法、必要とする学習スキルなども掲載されているが割愛していることをご了承いただきたい。

＜アクティビティ１：経済学とは何か？＞

・教員は、既習事項である経済学の用語やイメージを掲載したプリントを生徒に渡す。
・生徒はプリントを読み、ペア又は小グループでそれぞれの用語やイメージの意味や解釈を自分の言葉で発表し合う。
・教員はそれぞれのペアやグループに「他の教科でもこの用語を聞いたことがある？どのようなコンテクストで？」「なぜこの用語は経済学にとって重要なの？」などの発問を行う。

＜アクティビティ２：ミクロ経済、政府の役割＞

・教員は、政府が経済に与える影響についての事例やシナリオと、質問が掲載されたプリントを生徒に渡す。
・生徒はまずは自分で質問への回答を考え、プリントに書き込み、次にペア又は小グループでその考えを共有する。
・生徒はお互いの考えを比較し、ペアやグループの意見をまとめ、クラスの他のペアやグループの前で発表する。
・教員は、「最近のニュースで関係するような話を聞いたことがあるかな？」「他の国のケースを調べてみようか？」などの発問を行い、生徒たちが自ら現実世界の事例に積極的に触れるように促す。

＜アクティビティ３：世界経済、経済成長の戦略＞

・教員は生徒に対して以下のような質問を投げかける。
「経済成長と経済発展を定義してみて」、「その２つをどのようにして測ることができる？」、「ダイアグラムを使ってその２つをどのように表現することができる？」、「その２つはどの点が似ている？」、「その２つはどの点が異なる？」、「お互いにどのように影響し合っている？」
・生徒はペアや小グループになって、実際の国から一つを選び、上記の質問に実際のデータを用いて解答する。
・教員は生徒にデータ、グラフ、図、新聞記事をどこからどのように入手することができるか、扱い方の注意点などの指示をする。
・生徒は最終的にまとめた解答をレポートとして提出する。

＜アクティビティ４：ミクロ経済、市場の失敗＞

[3] Ibid. p.p. 34 – 39.

・教員は生徒を小グループに分け、それぞれのグループに異なるシナリオを渡す。
・生徒たちはそれぞれのシナリオに沿って役割を決め、ロールプレイを行い、解決方法を考える。
・以下のようなシナリオ例が考えられる：
「人間がカリフォルニア州で発生する山火事の９５％の原因を作っている」、「どのような当事者がこの状況に関与しているか？またどのように関与しているか？」「どのような戦略やアプローチをとることができるか？」
・生徒たちは演劇形式などで自分たちの行ったロールプレイと、考えた解決方法を発表してクラス内でシェアをする。
・生徒は最終的に解答をレポートにまとめて提出する。

＜アクティビティ５：マクロ経済、経済活動を測る・活動をイラストにする＞
・教員は生徒に、既習事項である経済活動の様々な測り方に関するプリントを配布する。
・生徒はペア又は小グループでプリントに書かれた測り方をお互いに説明し合う。
・次に、生徒は同じペア又は小グループで、一つ国を選択し、その国の経済活動を選択したやり方で測り、イラスト化し、発表をする。

上記の活動を表１に当てはめると、以下のような表になる。

表２　CALP の表に当てはめられたアクティビティ１から５[4]

Cognitive Academic Language Proficiency skills ↓	Pedagogy →			
	Activating background knowledge	Scaffolding for new learning input	Acquisition of new learning through practice	Demonstrating proficiency
Listening	アクティビティ２	アクティビティ２	アクティビティ３，５	アクティビティ２，３，４
Speaking	アクティビティ１，２	アクティビティ１，２	アクティビティ１，２	アクティビティ２，３，４
Interacting	アクティビティ１，２	アクティビティ１，２	アクティビティ１，２	アクティビティ４，５
Reading	アクティビティ１，２，４	アクティビティ１	アクティビティ１，２，３	アクティビティ２，４，５
Writing	アクティビティ２，４	アクティビティ２，５	アクティビティ１，２，３	アクティビティ２，３，４，５
Command terms and thinking skills				

上記してきたように、授業でのアクティビティが徐々に最も負荷の低い、既習事項をオーラルでインプット又はアウトプットする、という作業から、新しく学習した学習用語を文字でインプット又はアウトプットするとい

[4] Ibid. p. 33.

う作業まで移行させる工夫がなされている。上述したように、この CALP はまだ新しい概念であるため、IB 教育でも公開されている事例は限られている。以下に私の実践例を挙げたい。

② DP 歴史における指導実践例

上述したように、現在 IB をはじめ、世界で公開されている CALP の授業実践例は少ない。私が紹介するのは２０２０年１２月に出版された、半田淳子編著（２０２０）『国際バカロレア教員になるために　TOK と DP６教科の学びと授業づくり』に寄稿した拙稿「概念とスキルを重視した歴史教育　―IBDP の手引きから学習指導要領への応用」で紹介している実践となる[5]。

ここで紹介している授業のサイクルは、①学習者の予習（既習事項の確認、CALP「読む」「聞く」）、②授業で全体でのディスカッションによる深化（CALP「対話する」「話す」）、③授業で問いを与えて全体で考える（既習事項から次の学習言語への転移、CALP「聞く」「対話する」「話す」）、④宿題や定期考査での課題として、問いについて自分の考えを述べる（新しい学習言語の習得、CALP「書く」）というサイクルである。

例えば、同書で取り扱った「アヘン戦争」を単元とする場合、①予習：学習者はジョージ３世の書簡と乾隆帝の書簡を読み、論点の違いを明確にしてくる（読む）、②活動１：授業でお互いの考えを発表し、考えを深化させる（対話する、話す）、③授業で「アヘン戦争はどの程度アヘンが原因だったのか？」のような概念的な問い（ここでは「原因」、詳しくは同書を参考にしてほしい）に対してさらにディスカッションを深化させる（対話する、聞く、話す）、④宿題として、与えられた問いに対する自分の考えを書いてくる（書く）のような例となる。

上述した IB の活動例も Listening から Reading までは順序性よりもバランスの取れた配置を意識しているように、私もこの CALP 活動は予習、授業での活動で意識的にバランスよく配置すればよいと考えている。IB の考えと一致していることは、最終的に writing に活動を集約させていく点である。

３　おわりに

今回の寄稿では、日常会話を円滑に行うための言語力（BICS）と異なる、専門的・学術的な表現を行うことができる言語力（CALP）について、世界で最新の教育動向の一つを紹介させていただいた。私は大学生時代に交換留学で、ドイツの大学にてラテン語と西洋古代史を学んだことがあるが、ドイツ語の学習時代にも、よくきかれたのが、「サマーコース（ドイツの大学が夏休み中に行っている語学講座）をとっても、あの人格好いい、などのドイツ語表現力がつくくらいだ（今から考えると BICS への批判）」「大学の講義でドイツ語を学んでも、グリム時代の古めかしいドイツ語しか話せない（今から考えると CALP への批判）」という批判合戦であった。グローバル時代を生きていくためには、両方の言語力が車の両輪のように必要となってくるのであろう。

特に高校生段階の英語となると、その内容が地理歴史科・公民科の諸教科と重なる点が多く、お互いの教科がより連携を密にすることで、日本語・英語のバイリンガルで生徒の CALP を高めることができると考えている。BICS と異なり、放っておいたら生徒たちは意識的に CALP の言語活動を日常的には行わないからである。

本寄稿が日々の言語教育に取り組まれている先生方にとって、少しでも授業や研究の参考になる点があれば幸いです。

---

[5] 拙稿「概念とスキルを重視した歴史教育　―IBDP の手引きから学習指導要領への応用」，半田淳子編著（２０２０）『国際バカロレア教員になるために　TOK と DP６教科の学びと授業づくり』大修館書店　p.p. 90－105.